

1

今年度の結果と取り組みについて

(1) 全国学力・学習状況調査

○●国語●○

<p>国語A (領域ごと)</p> <p>①話すこと・聞くこと 概ね良好な結果であった</p> <p>②書くこと 概ね良好な結果であった</p> <p>③読むこと 概ね良好な結果であった</p> <p>④言語事項 概ね良好な結果であった</p> <p>(問題形式)</p> <p>①選択式 概ね良好な結果であった</p> <p>②短答式 概ね良好な結果であった</p> <p>③記述式 該当問題なし</p> <p>(無解答率) 概ね良好な結果であった</p> <p>(その他)</p> <p>学校の特徴的なことについて記入 ・もっとも正答率の高かった設問 9二1、9二2、9三イ ・もっとも正答率の低かった設問 9一2 ・もっとも無解答率の高かった設問 9一2</p>

<p>国語B (領域ごと)</p> <p>①話すこと・聞くこと 該当問題なし</p> <p>②書くこと 概ね良好な結果であった</p> <p>③読むこと 概ね良好な結果であった</p> <p>④言語事項 該当問題なし</p> <p>(問題形式)</p> <p>①選択式 概ね良好な結果であった</p> <p>②短答式 良好な結果であった</p> <p>③記述式 概ね良好な結果であった</p> <p>(無解答率) 概ね良好な結果であった</p> <p>(その他)</p> <p>学校の特徴的なことについて記入 ・もっとも正答率の高かった設問 1一、3一 ・もっとも正答率の低かった設問 2三 ・もっとも無解答率の高かった設問 3三</p>
--

<p>分析 A問題</p> <p>6二 (選択した理由：全国平均と比較し、正答率が低いため)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題の意味をとらえられていない可能性がある。 ・問題文に使われている単語の意味を理解できていない可能性がある。 <p>2二 (選択した理由：全国平均と比較し、正答率が低いため)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題の意味が読み取りにくかった可能性がある。 ・本文の内容を深く読み取れていない可能性がある。 ・論理的思考力・・・知らない情報、いる情報を判断する力が不足していた可能性がある。 <p>B問題</p> <p>1二 (選択した理由：全国平均と比較し、正答率が低いため)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな文字に注目してしまい、「日曜日」という部分を読み落としていた可能性がある。 ・問題をよく見ておらず、必要な情報をよみとるのが難しかった可能性がある。
--

○●算数・数学●○

算数・数学A

(領域ごと)

①数と式

概ね良好な結果であった

②図形

良好な結果であった

③関数

良好な結果であった

④資料の活用

概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式

概ね良好な結果であった

②短答式

良好な結果であった

③記述式

該当問題なし

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・もともと正答率の高かった設問 3(4)
- ・もともと正答率の低かった設問 9(4)
- ・もともと無解答率の高かった設問 10(3)

算数・数学B

(領域ごと)

①数と式

概ね良好な結果であった

②図形

大変良好な結果であった

③関数

概ね良好な結果であった

④資料の活用

概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式

概ね良好な結果であった

②短答式

概ね良好な結果であった

③記述式

良好な結果であった

(無解答率)

良好な結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・もともと正答率の高かった設問6(1)
- ・もともと正答率の低かった設問 2(2)
- ・もともと無解答率の高かった設問 5(2)

分析

A問題

4 (2) (選択した理由: 全国平均と比較し、正答率が低いため)

- ・「軸」、「対称移動」という語句の意味が理解できなかった可能性がある。
- ・文章に含まれる条件や問われている内容を理解することが難しく、大問における他の問題が当該問題と関連しているのかわからない(あるいは独立して解けるのか)等の理解ができていない可能性がある。
- ・問題に関係する単元の内容が、反復的に利用するものではなく、定着が不十分だった可能性がある。
- ・作図が苦手である可能性がある。
- ・応用力がない可能性がある(軸の向きが垂直方向ならできた可能性がある)。

B問題

1 (1) (3) (選択した理由: 全国平均と比較し、正答率が低いため)

- ・(1) ケアレスミスの可能性はある。
- ・(3) 問題が理解できていない可能性がある。
- ・決まった、習ったパターンだと正解できるが、少し問われ方が変わると難しく感じ、解答できなかった可能性がある。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

平均正答率は H20 年で大きく上昇し、H21 年で下がり、H24 年までは横ばいだった。H24 年からは上昇傾向にあり、今年度、H19 年から見てきて、一番高い数値となっている。すべての科目において正答率、無解答率ともに全国値と比較したところ、良好な結果であった。背景として、授業規律や基本的な生活習慣が確立していることが考えられる。また、家庭の協力、幼少期の文化的経験の影響も感じられる。

学力高位層と学力低位層についての分析

学力高位層は H20 年から H24 年まで減少傾向にあったが H24 年より増加傾向が続いていた。昨年度少し減少してしたが、今年度は、下位層とクロスし、H19 年度から一番高い数値となった。また、学力低位層は H21 年より減少傾向にあり、高位層とクロスし、H19 年度から一番低い数値となった。背景として、3 校合同で展開している、授業づくり・集団づくりの成果と思われる。

○●取り組み●○

学力向上に関する取り組み

①授業づくり研修

<3 校合同>

豊川中学校区での連携。指導案づくりから小中で連携し、3 校合同で授業づくりを行った。

<校内研修>

部会内で取り組み（研修内容）の確認、学年方針を確認、計画、実施を徹底する。また、取り組み内容の反省を毎回行い、次の計画を進める。四人班の活用・コの字は継続。

②授業研・教材研修などの校内研修の充実

授業アンケート、従来の授業研究は継続する。さらに、教職員でグループワークをしたり、交流する機会を設け、組織的な授業改善につなげる。教材づくりのヒントにすること、教材を練ることが目的であり、また他教科と関連付けた授業内容も考案していく。分かりやすい教材提示に ICT を積極的に導入し、研修や環境整備も推進していく。ユニバーサルデザインを取り入れた授業を展開することで、多様な子どものつまずきに対応。ビデオ授業研では、子どもがどこで学び、どこでつまずいているかを共有し授業づくりに活かす。また、短期目標を設定し、チェックシートの活用により、可視化など、PDCA サイクルを推進している。

③学力向上に向けた取り組みの継続と新しい取り組み

自主勉ノートを活用し家庭学習の習慣化を目指す。家庭学習の手引きを年度当初の家庭訪問で配布。読書タイム、昼学習会、放課後学習会、自主活動（子ども会活動）と連携した授業づくりを行っていく。TT、分割授業、少人数指導による、基礎基本の定着と子どものペースに寄り添った指導。専門支援員、支援教育サポーターとも連携し、子どもにつまずきに対応。府の HP にある問題や、いばらきっすスタディの活用。テスト前の授業がんばろう週間の取り組みの一つとして、保護者には携帯メールで宿題のあるなしを配信し、家庭での声掛けの協力を得る。今後も子どもの姿から、今の子どもに必要な取組みをすすめる。

④学力の各データ分析、考察、次年度の方針立て

確認テストの実施（経年比較）、定期考査と自主勉の相関など。学力向上の成果を数値で表し、検証する。

⑤低学力層の減少に向けた取り組み

習熟度別学習の実施、ユニット制の導入、新聞学習の計画的導入、補習学習の実施。全国学力・学習状況調査にて検証する。

⑥体力向上

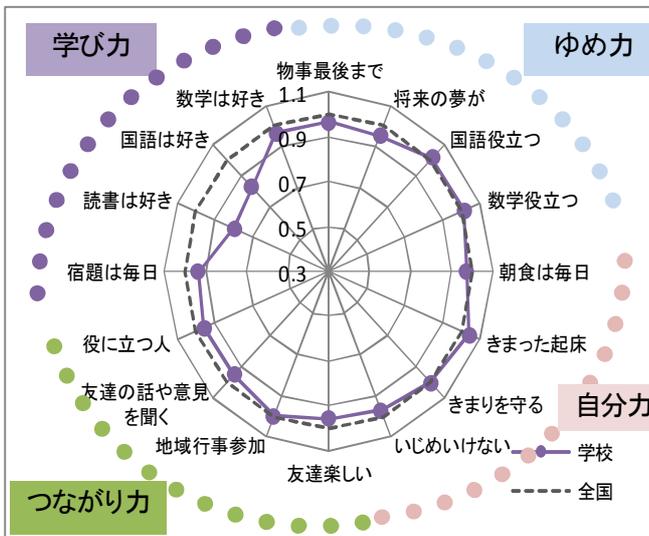
食育や体の発達など教科を通じて子どもの意識を高める。あいさつ運動やボランティア活動、部活動などの自主活動の活性化を図る。

⑦ゆめ力の育成

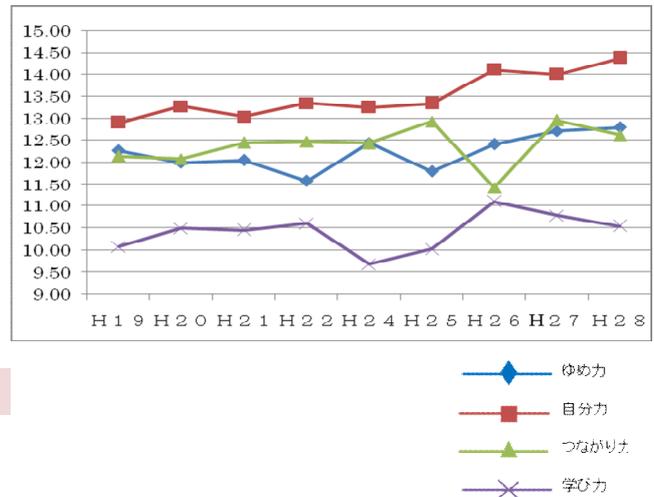
人権総合学習との連携。各教科でも集団づくりをすすめる。職業体験などを通じて自尊感情を高め、短・中・長期的な目標をもたせる取り組み。最後まであきらめない進路決定までのプロセスの構築。

○●子どもたちに育みたい力●○

今年度の結果



これまでの推移



分析

- 学び力では、H19年度から上昇傾向にある。ただし、「国語は好き」と「読書は好き」の項目の数値が他と比べて低い傾向にあるので、朝の読書タイムなどを活用し、改善につとめていきたい。
- ゆめ力は、H19年度からみてきて、もっとも高いポイントとなっている。すべての項目において、高いポイントを示している。継続的に授業を組み立て、目標をもって取り組んだ結果だと思える。
- 自分力は、H19年度からみてきて、もっとも高いポイントとなっている。すべての項目において、高いポイントを示している。今後も自分力を高めていけるように、取り組みを継続していく。
- つながり力は、すべての項目において、高いポイントを示している。「とよかわフェスタ」「やよい祭り」「地域の運動会」などの地域行事に参加していることもあり、地域とのつながりの強さを感じる結果である。

取り組み

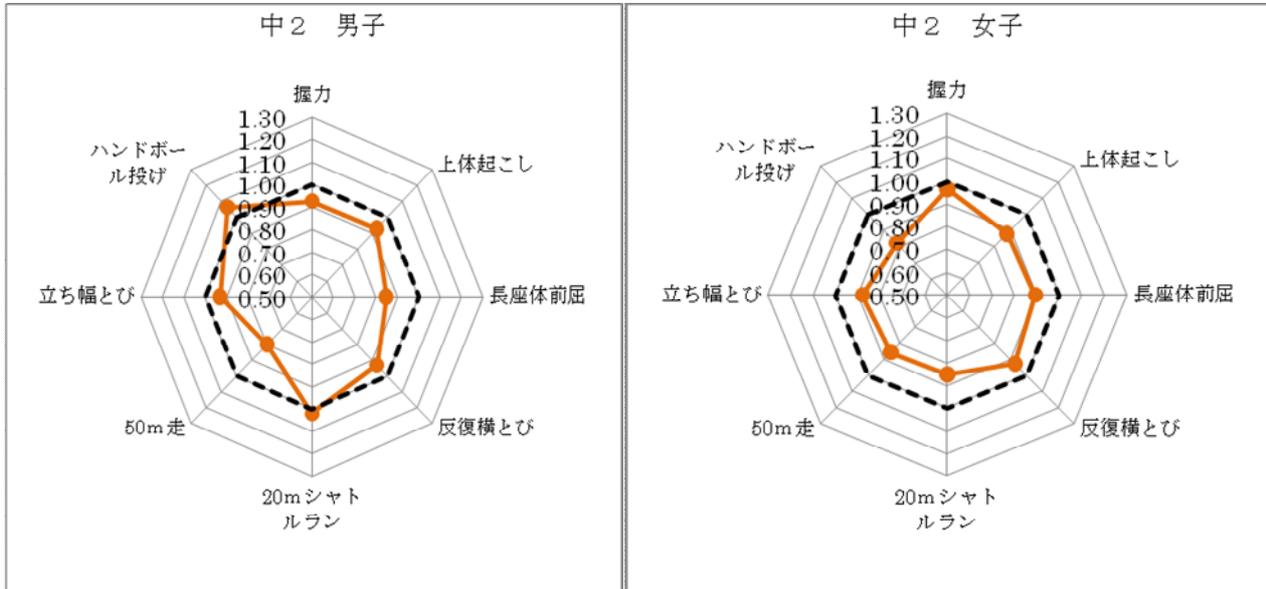
- 学び力は、引き続き、読書タイムの継続と「学びの共同体」の理論に基づいた、グループワークと子ども同士の交流に重点を置き、自らの力で課題を解決することを大切にした授業づくりを推進する。また、昨年度から家庭学習の習慣化に重点をおいて取り組みを継続している。子どもの実態に合わせて、子どもたちが家庭学習を習慣化できるよう取り組んでいきたい。
- ゆめ力、自分力は上昇傾向にあり、これらは学年・学校が落ち着いている状況にあることが一つの要因であると思われる。今後とも、子どもに自立を促す自主活動を推進し、人権総合学習を通じ、キャリア教育をおこない将来への展望をもたせたい。
- つながり力は昨年度よりはポイントがやや下がったが、高いポイントを示している。本校では、1年時から、集団づくりを大切にしており、今後も継続していきたい。地域行事についても参加を促すとともに、様々な人と触れ合うことで他者から学ぶ姿勢や、地域の良さを語り継ぐことのできる子どもを育てたい。

(2) 全国体力・運動能力、生活習慣調査

○●体力●○

男子 (中2)

女子 (中2)



分析

全国平均と比べると、男子は20mシャトルラン、ハンドボール投げは上回った。しかし全体的な値で見ると、男女ともに低い結果となった。特に男子は50m走や長座体前屈で、女子は握力以外の種目で、値の低さが顕著に見られる。運動部や地域スポーツクラブへの所属は男子で87%、女子で91%であり、全校平均と比べても男子はさほど差はなく、女子は上回っている。アンケートの結果では運動が『好き』『比較的好き』と答える生徒が男子は100%なのに対して、女子は59%と低い値を示している。女子は運動部への所属率は高いが、さほど運動が好きとは思っていない生徒が多いといえる。

取り組み

今年度も意欲的に取り組めるよう、2、3年生に関しては、新体力テスト実施前に昨年度の個人データを見せた。昨年度の記録を上回れるよう、頑張る生徒の様子も見られた。しかし種目によっては、取り組む意欲が欠けていたのか、持っている力を十分に発揮していないような結果が残った。

体を動かすことの楽しさが味わえるよう授業づくりに取り組んでいる。授業規律を徹底しつつ、活動内容や方法を工夫している。補強運動やストレッチなどをより多く取り入れ、基礎体力や柔軟性の向上にもつとめている。

女子はあまり運動が好きだとは思っていない学年である。今までの運動経験の中で、成功体験が少ないように感じる。運動(技)ができないことで運動嫌いになっているように感じる。動きのポイントを伝え、できる動きを増やすことにより、体を動かすことの楽しさを伝えていきたい。そして生徒自らが意欲的に活動に取り組めるようにしていきたい。

2

3年間の計画

	(各校)		(ブロック共通)
	学力向上	体力向上	中学校ブロック連携
目標	聴き合い学びあう子どもを育てる	運動に親しむ資質や能力、 明るく豊かな生活を営む態度の育成	連携の強化
平成26年度	<ul style="list-style-type: none"> ①3校合同授業研の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・6月(豊川中学校)、10月(豊川小)、2月(郡山小) ・7月(夏季ビデオ研) ②授業づくり研修を、人権教育・支援教育・情報教育などと連携し展開する。ICT活用に特化した研修も含む。 ③継続して取り組みを行う。 ④確認テストから学力データを経年で蓄積し、学年の特徴や学力を総合的に分析 ⑤中高連携を密に。キャリア教育の充実。 ⑥校内の授業アンケートを行い、子どもの授業内容の定着度合いや、授業づくりの重点課題を分析。また、全国学力・学習状況調査の結果分析もふまえて、子どもに必要な学力を授業でどう付けていくかを考える。 ⑦ユニバーサルデザインを取り入れた、授業の展開。生徒一人ひとりのつまづきは多種多様であるが、一人残らず授業に参加させ学びを保障する取り組みを展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ①4月新体力テストの実施 過去データと比較できるよう、業者へデータ分析を依頼する。 ②授業づくり 体を動かせることを意欲的に取り組めるように、授業の内容・方法を工夫する。研修にも参加し授業力向上に努める ③具体的な目標設定 目標や到達点を文章化することにより、継続的に取り組む体制を組織的につくる。 ④生活アンケートの実施 3食きちんと食べているかなど、食事・運動・休養が正しく行われているか検証、適宜面談等をおこなう ⑤部活動の活性化 生徒数減少にともない部活数を増やせないが、部活の活性化につとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ●保・幼・小・中・高連携の基盤づくり ・基礎的な生活習慣の定着を進めていくとともに、様々な生活体験を通して心豊かに、安心して過ごせる集団をつくり、遊ぶこと、体を動かすことが楽しいと思える子どもを育てる。 ・校区全体で、つながりを持って取組を展開し、一人も見捨てず、集団づくりと授業づくりの連携のなかで、全ての子どもたちが、違いを認め合い育ち合う集団をつくる。
平成27年度	<ul style="list-style-type: none"> ①3校合同授業研の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・年3回 ・夏季ビデオ研 ②授業づくり研修を、人権教育・支援教育・情報教育などと連携し展開する。ICT活用に特化した研修も含む。 ③継続して取り組みを行う。 ④確認テストから学力データを経年で蓄積し、学年の特徴や学力を総合的に分析 ⑤中高連携を密に。キャリア教育の充実。 ⑥校内の授業アンケートを行い、子どもの授業内容の定着度合いや、授業づくりの重点課題を分析。また、全国学力・学習状況調査の結果分析もふまえて、子どもに必要な学力を授業でどう付けていくかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ①～⑤を継続して実施 分析の結果、継続して実施する方向で決定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●保・幼・小・中・高・大連携の強化 ・各校で行っている授業づくりや校内研において、学力担当者を中心として、積極的に参加する。 ・郡幼稚園の公開保育、研究会に参加。 ・職業体験や生徒会・児童会などの連携行事で子ども同士の交流を深める。 ・保・幼・小・中・高・大での連携を継続させる。 ・内容の検討、ふりかえり、子どもたちへの定着を検証。
平成28年度	<ul style="list-style-type: none"> ①②を継続、3年間の成果を検証。 ③図書館利用状況、自主勉ノートと学力等の相関から分析、考察、検証。 ④3年間の学力データを分析・考察。 ⑤全国学力テストより分析・考察。 ⑥スポーツテストにて検証。 ⑦学習状況調査・生徒質問紙および生活アンケートより検証、分析。 	<ul style="list-style-type: none"> ①～⑤の分析改善策検討 	<ul style="list-style-type: none"> ●校区全体での連携推進 ・高校卒業時点を視野に入れ、豊かな進路選択ができるような、学力・生活習慣の定着。 ・成果と課題の分析。